

第1学年歯科医院見学実習の事前・事後教育における発見的学習の展開

—キャリア教育における学習方略への焦点化について—

山崎 晴美^{1,3} 三澤麻衣子^{1,3} 上原 任^{1,3}
尾崎 哲則^{1,3} 桑田 文幸^{2,4} 中島 一郎^{1,4}

The Application of Discovery Learning to Early Exposure Education

Haruyoshi Yamazaki^{1,3}, Maiko Misawa^{1,3}, Tamotsu Uehara^{1,3},
Tetsunori Ozaki^{1,3}, Fumi-yuki Kuwata^{2,4} and Ichiro Nakajima^{1,4}

1. はじめに

(1) 大学教育で培われる学士力

中央教育審議会から、グローバル化する知識基盤社会において学士レベルの資質能力を備える人材養成は重要な課題であるにもかかわらず、目先の学生確保が優先される傾向があり、そのために大学の教育の水準や学位授与の水準が曖昧になったり、学位の国際的通用性が失われたりしてはならないとして、各大学の自主的な改革を通じ、学士課程教育における「学位授与の方針」、「教育課程編成・実施の方針」、「入学者受入れの方針」の3つの方針の明確化等を進める必要があるなど、学士課程教育の構築が我が国の将来にとって喫緊の課題であるという認識のもと、2008年に答申『学士課程教育の構築に向けて』¹⁾が出された。その中で、各専門分野を通じて培う「学士力」として以下の項目をあげている。

1) 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解（多文化・異文化に関する知識の理解，人類の文化・社会と自然に関する知識の理解）

2) 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能（コミュニケーション・スキル，数量的スキル，情報リテラシー，論理的思考力，問題解決力）

3) 態度・志向性

自己管理能力，チームワーク・リーダーシップ，倫理観，市民としての社会的責任，生涯学習力

4) 統合的な学習経験と創造的思考力

自らが立てた新たな課題を解決する能力
また，大学教職員への研修の活性化と教員業績評価での教育面の重視，質保証の教科等についても提言している。

¹ 日本大学歯学部 医療人間科学分野

² 日本大学歯学部 基礎自然科学分野（化学）

³ 日本大学歯学部総合歯学研究所社会歯学研究部門

⁴ 日本大学歯学部総合歯学研究所歯学教育研究部門
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台1-8-13
(受理：2014年9月30日)

¹ Department of Community Dentistry, Nihon University School of Dentistry, Tokyo, Japan

² Department of Basic Science, Nihon University School of Dentistry, Tokyo, Japan

³ Division of Social Dentistry, Dental Research Center, Nihon University School of Dentistry

⁴ Division of Dental Education, Dental Research Center, Nihon University School of Dentistry
1-8-13 Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101-8310, Japan

一方、大学卒業者を受け入れる産業界の立場から、経済産業省（2006）は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として、以下の3つの能力を「社会人基礎力」²⁾として教育界へ提唱している。

- ①前に踏み出す力(アクション)：主体性，働きかけ力，実行力
- ②考え抜く力(シンキング)：課題発見力，計画力，創造力
- ③チームで働く力(チームワーク)：発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握力，規律性，ストレスコントロール力

(2) 本学歯学部の初年時教育における学士力教育

前述の答申によれば、大学教員を対象とする調査では、6割を超える教員が「学力低下」を問題視し、特に論理的思考力や表現力、主体性などの能力が低下している。また、大学1年生を対象とした調査結果では、大学の授業に「ついていけない」、大学で「やりたいことが見つからない」等の回答が相当の割合を占めている。そのような状況の中で、初年次教育、すなわち「高等学校や他大学からの円滑な移行を図り、学習及び人格的な成長に向け、大学での学問的・社会的な諸経験を成功させるべく、主に新入生を対象に総合的につくられた教育プログラム」が各大学で導入されるようになってきた。これは、主体性や意欲の乏しい学生への対応策として、アメリカの初年次教育において考案されたものであり、その取組が中退を抑止する上で有効な役割を果たすとともに、その後の大学生活への適応度を規定しているとされているものである。

我が国の歯科医学初年時教育においても、プレゼンテーションを情報教育の一環として行ったり、ノートのまとめ方、グループ討論、プレゼンテーション、レポートのまとめ方、論理的思考などを、日本語表現、コミュニケーション

教育、論理学、教養基礎ゼミや専門の教科において行ってきた。また、とくに学習技法・学習方略の習得を目的とする教科も設置されるようになってきた。本学歯学部においても学士力養成の取り組みとして、2013年より第1学年前期教科として「学修の技法 [教養演習]」が開始された。これは「初年次から学士課程の移行に求められる各授業に共通した基本的な各学修技法を修得する。さらに医療人育成の前提となる社会人としての学びの在り方について各演習を通じて理解を深める」³⁾ことを目的としているものである。ノートの取り方、小グループでのグループディスカッション(以下SGD)、プレゼンの作成・発表等を通じて、テーマ設定、情報の収集と整理、問題点の発見、問題の解決といった、大学の授業活動に求められる学習方略を身につけていくものである。本教科は、少人数のグループでのテュートリアル教育において、問題解決の方法を探求する後期教科「自主創造の練成」へと続くものである。

とくに「学修の技法」では、どのように学習を進めていったかという学習方略の習得に焦点を当てている。すなわち、知識の習得ではなく、本教科でどのような学習方略を応用し、また必要に応じて開発していったかという側面を意識化させている。また、「学修の技法」で習得された学習方略を、他教科での学習において応用することを念頭に置いている。

(3) 本学歯学部の医療人間科学教育

本学歯学部では、2000年以降、医療人を養成するキャリア教育として、「幅広い教養と総合的判断力を身につけることの意義を意識するとともに、歯科医療の現場を体験することにより、将来の目標を確認し、医療人と恣意の良識と豊かな人間性を体得する」⁴⁾ことを目的として、「医療人間科学」の教科を第1～4学年で展開してきた。

この中で、第1学年教科「健康と社会（2013

年より医療と社会)では、教科の一環として歯科診療所での見学実習を行ってきた。また、第2学年教科「医療と倫理」では本学歯学部附属歯科病院での見学実習を、第3学年教科「生活と福祉(2013年より医療と福祉)」では、将来、保健指導や診療に関わるであろう高齢者や障害者に対する理解を深めるために、社会福祉施設における施設利用者の生活を将来の歯科医師としての観点から見学することを目的として、社会福祉施設の見学実習を実施している。

これら第1～3学年で展開される施設見学では、事前学習とシェアリングによる事後学習を重視してきた。これらは、講義による知識伝授だけでなく、個別学習やグループ学習を交えながら、自ら調査した結果をまとめ、発表し、討議していくものであり、学生の意欲的な参加が求められている。

柳井(2001)は、学生のキャリア発達を図るためには、学生自身が自己教育力を育て、あらゆる学習に意欲を燃やすことが重要であり、学習意欲開発の方法として、①目的意識を高める、②自己概念の形成をはかる、③社会的役割の形成と自覚をはかる、④知的好奇心を育てる、の4項目をあげている⁹⁾。これらの学習を支えるのは学士課程教育で求められる学習技法(Study Skills)や学習方略(Learning Strategy)であり、学習への動機付けである。

そこで、2013年度開講の「学修の技法」で習得した学習方略を、どのように見学実習の事前、事後学習に反映させることにより、学生の知的好奇心を高め、学習への動機付けを高めていくか、2013年度の第1学年の歯科医院見学実習での活動を検討し、その検証の方向性を見いだしていくことにする。

2. 歯科医院見学実習の事前・事後学習

(1) 歯科医院見学実習の概要

2013年度における歯科医院見学実習では、夏

期休暇中に実施される歯科医院での見学に先立って事前学習を、見学終了後8月末に事後学習を行った(図1)。事前学習では、学生は講義を通じて歯科医院見学に必要な情報学ぶ⁵⁾。また講義と並行して、事前訪問に備えて見学テーマの設定、エントリーシートの作成などの準備を進め、実習先歯科医院への事前訪問(採用面接)を行い、見学実習への準備を進めていく。この間、見学において必要となる事項を学ぶとともに、その中で、どのように行動するかを探索していく。また、事後学習として、見学終了時に実習日誌の記載とレポートの提出、夏休み終了時にSGD(KJ法を使用)による見学成果の振り返りを行い、また歯科医院からの講評をフィードバックした⁶⁾。

佐藤ら(2010)は、「体験」を授業に取り入れる際に、体験学習では以下の活動ごとに目標は異なっているので、それぞれの活動の目的・目標を明確にしておかないと孤立した活動となり学習の全体目標にとって意味をなさなくなることを、活動を孤立させないためには、講義と相互補完的に展開する必要がある事を指摘している⁷⁾。

・見学・観察

目標：問題の発見、対象への関心・興味の喚起

・調査

目標：学びの方法の習得、推論・解釈

・実習・実験

目標：既有知識の動員・検証、推論・解釈、新たな問題の発見、対象への新たな関心・興味の喚起

以上のように、見学・観察、調査(自己学習)、実習・実験は並行して互いに関連しながら進んでいくことが必要であるとされている。本学歯学部の歯科医院見学実習事前・事後教育プログラムも、この方向に沿って展開している。

しかし、ここで浮上してくるのは、より学習

大学における授業の流れ

6月第3週 歯科医院を知る	職場としての歯科医院 担当 尾崎 ・歯科医院とはどのようなところか理解する。・歯科医院の設備・スタッフについて理解する。・歯科医院の立地とそのあり方。・地域社会との関わり。[ビデオ教材使用]
	歯科医院の人間関係 担当 関口 ・院長は職場のリーダーとして、どのような使命感と理念をもち、それを診療に生かしているか。・歯科医師とスタッフ、患者さんとの関わり方。[スライド教材を使用して講師歯科医院の紹介]
6月第4週 実習オリエンテーション	実習オリエンテーション 担当 三澤・山崎 ・実習の目的と流れについて理解する。・実習先歯科医院の特徴を理解する重要性について。・実習テーマについて。 [実習必携配布・実習先歯科医院の通知・エントリーシート配布]
	歯科医院見学実習にあたって 担当 上原 ・医療の現場では、学校とは異なる社会人としての対応が求められることを理解する。 ・マナーの持つ意味について理解する。
7月第1週 実習オリエンテーション	歯科医院・歯科医療の基礎知識 担当 三澤 ・どのような疾患を抱えた人が訪れるのか理解する。 ・歯科医療とは何か、歯科医院の機能について理解する。
	事前訪問(採用面接)に向けて 担当 三澤・山崎 ・書類作成(誓約書)について。 ・事前訪問の方法について、具体的に確認する。 ・実習テーマの設定について。
7月第2週 実習オリエンテーション	見学前グループディスカッション 担当 本学教員 ・10名前後の小グループによるディスカッション(ティьюーター付)。 ・各人の実習テーマ(どのような興味・関心を持って実習に臨むか)を話し合い、互いの理解や関心の在り方を知る。 ・事前訪問を行った者については、事前訪問の様子を紹介する。 ・話し合いの中から、自己の実習テーマをより明確化するとともに、事前訪問時での留意点・質問項目等を考える。 [KJ方に準じて意見を集約]
6月第4週 実習オリエンテーション	実習オリエンテーション 担当 山崎・三澤 ・実習における注意事項。歯科医院見学において過去に指摘された問題をふまえて具体的な注意。・歯科の特徴。 ・実習記録、レポートの作成の意義と提出方法について理解する。
	歯科医院見学実習にあたって 担当 中島・山崎・三澤 ・歯科医院見学実習の意義を明確化する。 ・本学の教育が、地域で開業する先生方に支えられている事を理解する。
7月第2週 実習の事後教育	見学後グループディスカッション 担当 本学教員 ・10名前後の小グループによるディスカッション(ティьюーター付)。 ・レポートや体験談をもとに、各自の実習体験をグループで共有化する。[KJ方に準じて意見を集約]

学生の自己学習の流れ

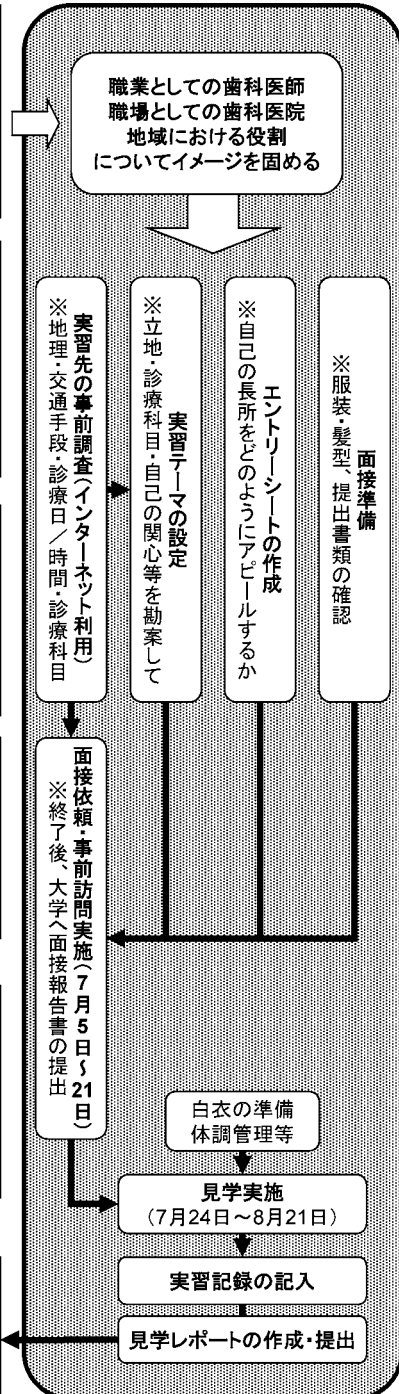


図1 平成25年度における歯科医院見学実習の事前・事後学習の流れ

意欲を高めるために、教育過程の進行に伴って、どのような学習方法を学生に提供しうるかという課題である。

(2) 事前・事後学習における体験実習の「学び」

ここでは、歯科医院見学実習で実施されている事前・事後教育プログラムにおいて展開されている体験学習を取り上げ、「学修の技法」で取り上げた技法(〈〉で示す)との関連を示す。なお、学生には、「学修の技法」で習得したどの技法を用いるのか強調して説明した。

a. 実習必携 〈取り組むべき課題の発見〉

歯科医院見学実習を実施するに当たって、その手引きとして『実習必携』を配布している。実習必携には、第1学年から第3学年で行われる医療人間科学見学実習の意義と実習生心得、歯科医院見学実習の目的、学習目標、事前・事後学習の流れ、実施要領などが記載されており、講義で解説を受けながら理解を深めていく。また、事前訪問や見学の結果を記録するための「採用面接報告書」「実習日誌」の欄、自己の実習プロセスの進捗をチェックする「プロセスチェック欄」、実習レポートの書式、内容、表現などをチェックする「実習レポートチェックリスト」などが設けられている。

学生は、事前学習を始めるに当たってこれを通読することが求められる。それによって、これから展開される学習への展望を得るとともに、「学修の技法」で強調されている自己が取り組むべき課題の発見するのである。なお、本必携は、歯科医院見学実習の概要をお伝えし、指導の参考にしていただくために歯科医院の指導医にも送付している。

[今後の課題] 学生がどれだけ本実習について理解し、意欲を持って実習に臨むかは、実習必携をどれだけ読みこなしているかに関わっている。どのような内容をどのように伝えていくか、学生、指導医の意見なども取り入れながら検討を加えていくことが望まれる。

**b. 事前訪問(採用面接)のための予備調査
〈インターネット調査〉**

実習先歯科医院の通知を受けた学生は、見学に先立って事前訪問(採用面接)を行う。事前訪問の前に、実習先歯科医院について、各自で予備調査を行う。主にインターネット上の歯科医院のホームページ等を利用して、立地、診療の理念、診療科、診療形態、訪問のための経路等を調べていく「調べ学習」である。その際に、何を(対象)、何のために(目的)、どのように(方法)調べていくのかという方略を持っているか否かは、その成果に大きく係わる。

[今後の課題] 主な調査手段と思われるインターネット情報と利用の実態、テーマ設定上の有効性について検証していくことが望まれる。

c. 実習テーマの作成 〈自己の取り組むべき課題発見〉

歯科医師の1日を歯科医療行為以外の観点から観察する事を通して達成すべき目標として、以下の一般教育目標(GIO: General Instructional Objective)と3つの具体的行動目標(SBOs: Specific Behavioral Objectives)を設定した。これは、歯科医師という職業と、歯科医院および地域との社会的な関わりに対する理解を深めるためのものである。

一般教育目標

歯科医院における人間関係を知る

具体的行動目標

- ①職業としての歯科医師のあり方を知る
- ②組織としての歯科医院のあり方を知る
- ③地域における歯科医院のあり方を知る

歯科医院見学の事前学習では、各自が取り組むべき課題として、問題点の発見と、個別実習テーマの設定を行う。上記の具体的行動目標(SBOs)の3領域から、各自の希望するテーマを3つ以上用意し、優先順位をつけておくよう指示している。また、そのうちの1つ以上は、実習必携にある具体的なテーマ例ではなく、自

己のオリジナルテーマを用意する事を求めている。「学修の技法」では、自己の考えを客観的、批判的に検証することとともに、自己の関心や発見に基づいて課題を見いだしていくことを目標としている。

そして、学生は、事前訪問時、指導医と相談の上、実施可能な個別実習テーマを2つ決定し、これを持って見学に臨む。また、ここで決定されるテーマは、見学後作成するレポートのテーマになる。

[今後の課題] 個別実習テーマの選定は、歯科医師という職業に対する関心を反映していると思われる。課題選定と見学実習の効果・満足度について検証する事が求められる。

d. 事前・事後グループディスカッション <SGD, マッピング>

歯科医院見学実習では、事前・事後学習にSGDを実施した。ここでは、KJ法により意見を集めマッピングを行い、それに基づいて討議を行った。

山中(2000)⁹⁾によれば、グループ学習は、ブルーナーのグループによる発見学習など教育の中で古い歴史を持っているが、認知・状況論的な教育観へ変化しつつある中で最近になって再び注目を集めている学習技法である。「学修の技法」では、自己教育力を高め、問題解決を行っていく学習方略としてSGDを位置づけて実施している。

なお、問題解決に際して、知識、課題等を図示する方法(マッピング)には、川喜田(1967)によるグループでの意見集約を目的としたKJ法⁹⁾、Novac J.D. & Gowin D.B. (1984)による学生の科学的知識を表現する手段として考案された概念地図(concept map)¹⁰⁾、Tony Buzanによるマインドマップ(mind map)¹¹⁾等がある。KJ方は多人数の質的に異なる意見を持ち寄り、構造化していくのに適している。概念地図ではマップ上に思いつくままに複数の概念を置

くことができ、獲得した知識や課題の体系的な構造化(精緻化)に適している。マインドマップは中央にキーワードやイメージを1つのみ置き、そこから枝を伸ばしていく。ある問題に対する解決を模索するに適していると言われている¹²⁾。いずれも考え方の流れや全体像を把握するために優れた方法であるが、「学修の技法」では第1学年の学修の始めに当たり、直面する課題の問題点の抽出に重きを置く段階であるので、マインドマップを指導している。

歯科医院見学実習事前・事後学習では、グループの意見を持ち寄り、討議しつつ意見を共有し集約することを目的としているのでKJ法を用いた。

まず、事前学習では、「歯科医院で何を見てきたいか」「採用面接(事前訪問)について」疑問点・不安点を、事前訪問を済ませた者は感想を記入させ、見学実習を前にして、どのような実習テーマを選択しているか、各学生の興味・関心はどこにあるのかをグループで共有している。「学修の技法」でSGDやマインドマップを経験していることは、マッピングを行う事にとらわれていた注意を、課題の内容やそこから考察することに向けさせ、課題のより深い達成に寄与していると思われる。学生の中から「『学修の技法』でやりました」との声が聞かれ、SGD参加への抵抗感も少なくなっているように思われる。

また事後学習では、「歯科医院での見学実習で、もっとも印象に残ったこと」と題して歯科医院での発見をグループで共有している。

事後学習のKJ図作成では、従来は教員がタスクフォースとしてかなり指導的に関わっていた。2013年は、学生は「学修の技法」でSGD、マインドマップを経験していること、事前学習でKJ法を一度体験していることを踏まえ、教員の指示等は最小にとどめて実施した。スタッフミーティングでは、各グループを担当する教

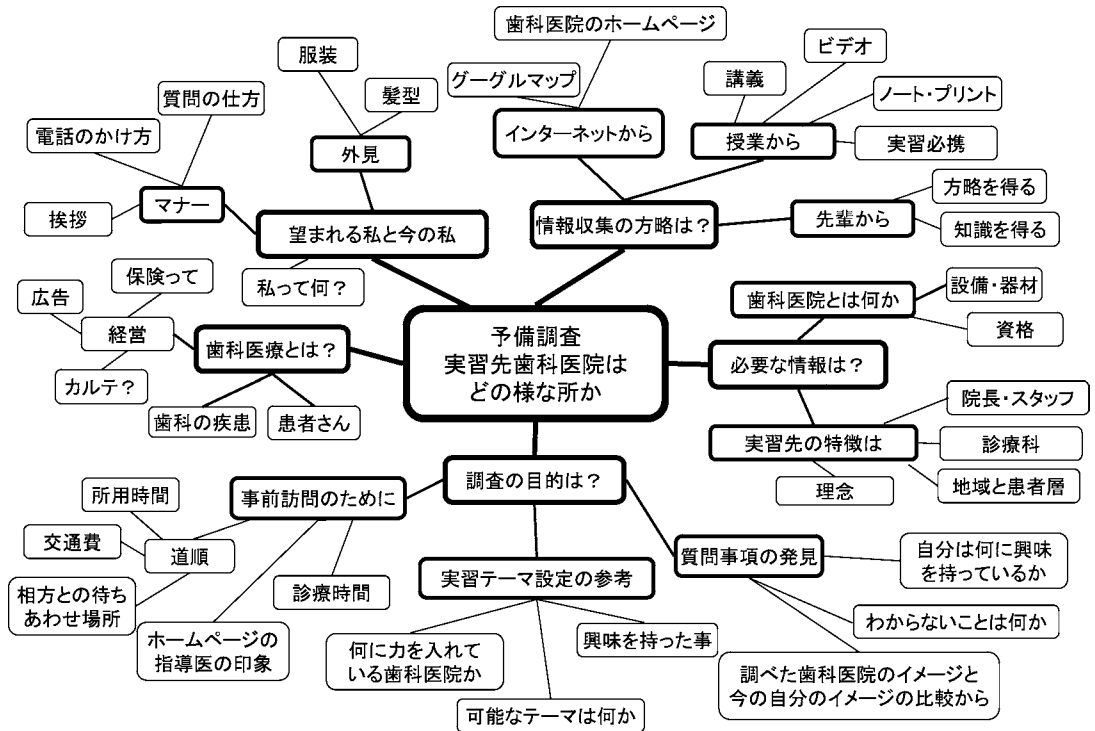


図2 自己学習「実習先歯科医院の予備調査」における諸活動の概念地図

員に以下の3点に沿って進行していただくようお願いいたします。

- ① 学生の書いたカードを読み上げて、どのようなことがあったかを質問し具体的に答えてもらう（課題の明細化・共有化）。
- ② KJ 図作成方法をプリントしたものを学生に渡し、教員の介入は最小限に止める。
- ③ グループ内でプレゼンを行う。

各グループの指導教員の役割も、タスクフォースからファシリテーター的な役割にシフトし、学生の課題意識も、図の作成だけでなくメンバー各自の体験への興味へと深まっていったように思われる。

なお、2013年度は実施できなかったが、各自がマッピングにより課題解決の方法を図示してみることも有効と思われる。図2に学生が直面するであろう課題の概念地図の例を示す。この

ようなマッピングは事前訪問だけでなく、夏休みの見学への準備と動機付けを高めるのにも有効である。

[今後の課題] マッピングの使用による学習効果の測定など今後の検討が望まれよう。

e. エントリーシート 〈自己探求・自己理解〉

学生は、事前訪問時にエントリーシートを歯科医院の指導医に提出する。ここで学生は文章によって自己をアピールする。文章表現というコミュニケーショントレーニングの方法として、また自己を客観的に眺めるための手段としても有効である。本学で用いているエントリーシートはA4判の両面に以下の5項目を記載するものである(図3)。

- ① 本施設の見学を希望する理由はなんですか
- ② 10年後のあなたにとって本施設の見学がどのように役立っていると思いますか

歯科医院見学実習エントリーシート2013

平成25年 月 日記入

ふりがな		学号番号 (4桁)			
氏名		男 女	年 齢	課 員	選
学校名・学年	日本大学 歯学部 歯学科 第1学年 在学中				
見学を希望する施設の種類					
本施設の見学を希望する理由は何ですか					
10年後のあなたにとって本施設の見学がどのように役立っていると思いますか					

あなたの自己PRをしてください

あなたで卒業したらどのような社会人になりたいと思っていますか

図3 本実習で使用のエントリーシート

- ③あなたの自己PRをしてください
 - ④今まで学業以外で力を入れてきたことは何ですか
 - ⑤あなたは大学を卒業したらどのような社会人になりたいと思っていますか
- なお、エントリーシート作成に当たっては、以下の指示を与えた。
- ・エントリーシートで面接を行う指導員に対して自己をアピールすること。
 - ・自分の人柄が相手に伝わるように書くこと。
 - ・他者に知られたくないことや自己に不利となることを記載する義務はないこと。
 - ・嘘を書いてはいけないこと。
 - ・文字数が少ないと誠意が伝わらない場合があること。
- また、書き方についてはあえて詳しい説明は

せず、書籍やインターネットで調査するように指示した。

例年、書く内容が見つからず苦勞する学生が多い。文章表現力に課題を持つものもいるが、むしろ自分の歯科医師感はどのようなものか、どのような人物が望まれるのか、自分の特性の中でアピールすべき事は何か等、自己に対する内省力が十分でないためと思われる。

内省力を高める自己探索は職業観の形成に不可欠である。キャリア教育では、「感」から「観」へという表現が用いられる。職業感から職業観へと言う意味である。浦上(2010)によれば¹³⁾、両者を意図的に分けて用いたのは津留宏であり、職業感とは、医療系ドラマや歯科医院を見て「すごかった」「感動した」など、感じた事をそのまま職業と結びつけたものである。職業観は

ものの見方の枠組みのことであり、感情面だけでなく、職業の持つさまざまな側面を枠組みとしてとらえ、それぞれの枠組に対する自己の価値観をも意味している。この、職業観の形成は、高度な知的操作であり、個人の知的能力を伸張するとされている。歯科医学教育の始めにあつてのエントリーシート作成は、その出発点となるものである。また、前述の柳井（2001）が述べたとおり、学習に対する意欲を高めていくためにも、自己概念の形成と社会的役割の形成と自覚は重要となるのである。

[今後の課題] エントリーシート作成への教育的働きかけと職業的自我同一性との関連の検証が求められよう。過去に自己を見つめた体験の有無やどのような目的意識を持っているかなどとの関連を検討する必要がある。

f. 実習日誌の記入 〈観察とインタビューによる調査・コミュニケーション技法〉

実習必携に設けられている実習日誌のページはフィールド調査の記録である。なお、実習日誌には、自由記述で記録を行う欄の他に、見学先歯科医院について理解を深めるために、以下に示す事項について、見学先の指導医へのインタビューと見学時の観察に基づいて記入する欄を設けている。

- ① 歯科医院の歴史
- ② 歯科医院の立地
- ③ 来院者の構成
- ④ 診療日と時間
- ⑤ 歯科医院の理念
- ⑥ 歯科医院で働く人々

以上の項目は、単に受け身で見学するだけではなく、実際にインタビューにより情報を収集する体験を通して得られるものである。「学修の技法」で行ったコミュニケーション技法、ノートを取り方の、また事前学習の調査法の応用である。学生によっては、予備調査の成果、実習テーマが反映された深い内容の質問を行う者も

いることが、次項で述べる見学レポートからうかがえた。インタビューの成果は、何をどのように聞くかにかかっている。取材対象となる指導医の在り方・生き方をどこまで理解しようとするか、学生の問題意識にかかっているといえよう。しかし、社会人としての会話については事前学習で指導は行っているが、自己の関心のみにとらわれ、礼を失した態度も問題となる。[今後の課題] インタビューを行った学生の達成度、満足度について検証することも有効である。またフィールド調査について、相互実習の機会を設けておくことなども今後の課題として検討すべきである。

g. 見学レポートの作成 〈報告書の作成〉

各学生の見学のまとめとして実習レポートを提出する。ここではA4判に40字×40行で以下の実習必携に示した内容についてまとめるよう求めている。

① 歯科医院の概要

4～5行で見学先歯科医院を紹介する。実習日誌のインタビュー欄の記載を参考にまとめる。

② ○○○○○について

2つ設定した個別実習テーマの1つ目 約15行

③ △△△△のコミュニケーション

2つ設定した個別実習テーマの2つ目 約15行

④ まとめ

最後に、総括、おわりになどのタイトルで4～5行

本レポートを作成するに当たって、学生はそれまでの学習プロセスを振り返り、自己のテーマと関連づけて観察結果をまとめていく。Microsoft Wordを用いて書式に沿って入力し、メール添付で提出を行うという作業は「情報リテラシー」の教科で履修している。文章作成に当たってはチェックリストに従って、書式・体

裁, 内容的妥当性, 文章表現等をチェックしてから提出するように指導している。文章を「大人の人に見てもらおう」ことも勧めている。また, 過去のレポート集を参考にすることも可能である。

レポートの内容については, 「職業観」というより「職業感」の水準にあるものも多いが, 医療人教育の初めに行う早期体験学習としては十分な成果が得られた。

[今後の課題] 学生のレポート提出状況を見ると, 例年, 内容的妥当性を欠いたもの, 文章表現が不適切なもの, Wordでの書式設定・メール添付などの情報リテラシーの未習熟など, 提出の過程において困難を感じるケースも多い。実態の把握が必要である。

3. 学習方略と教科教育

第1学年入学時, それまでのいわゆる受験勉強で, ともすると記憶一再生的方略におちいつている学生は, 大学で求められる課題探求的な学習に戸惑いを覚える。市川(2000)によれば, その学習者がどのような学習方略をとるかとい

うことは, 学習とはどのようにして成立するものかという考え方(学習観 concept of learning)に基づいているという。断片的な知識や手続きを覚え込むことが学習だと考えている場合, 単純な反復による機械的暗記に陥りやすく, また, 学習時における誤りや失敗が悪いことであると考えると, そのような経験から有効な情報を引き出そうという行動が見られなくなるという¹⁴⁾。換言すれば「学習とは何か」「学習の仕方とは何か」が理解できているかに関わっているといえよう。

そこで, 問題解決能力を高めていく教育では, 学習観や学習動機という面から, どのような学習方略がとられるかを明らかにし, 自己学習力を促す指導が求められている。

本学の『学修の技法』は, この学修方略の習得を目的としている。学習方略とは, 「学習の効果を高めることを目指して意図的に行う心的操作あるいは活動」(辰野, 1997)であり¹⁵⁾, この自己学習能力を高めるために不可欠とされるものが, 認知活動についての認知, すなわちメタ認知 (metacognition) である (三宮, 2000)¹⁶⁾。

表1 学習方略の下位方略とその分類 (三宮真智子 2008)¹⁷⁾

研究	認知的方略	メタ認知的方略	リソース管理方略
Weinstein & Mayer (1986)	リハーサル* 精緻化* 体制化* *基本的と複雑	理解モニタリング	情緒・動機づけ
Zimmerman & Martinez-Pons (1986)	体制化と変換 リハーサルと記憶 記憶とモニタリング レビュー (教科書) レビュー (ノート) レビュー (テスト)	自己評価 目標設定とプランニング 自己強化	情報収集 環境構成 援助要請 (教師) 援助要請 (友人) 援助要請 (大人)
Pintrich, Smith, Garcia, & McKeachie (1993)	リハーサル 精緻化 体制化 批判的思考	メタ認知的方略 ・プランニング ・モニタリング ・調整・制御	時間・環境構成 努力管理 ピア・ラーニング 援助要請

メタ認知とは、学生が自己の持つ学習方略に対する特性を理解し、求められる学習課題に対して適切な方略を選択し組み合わせていく能力である。自分の道具箱に入っている道具の特性を理解し、課題ら応じて自由に道具を選択し使いこなせる力とも言えよう。表1に学習方略の下位方略とその分類を示す¹⁷⁾。このメタ認知能力を育成していくためには、換言すれば学生の本題解決能力を高めるためには、「学修の技法」だけでなく、あらゆる教科の中で学習方略を、学生が意図的に用いていく場を提供することが求められる。

一方、従来の教科学習の中で学修方略の習得を行っていくのにも限界がある。教科学習の中では、教科内容の習得に重きが置かれるので、以下のような限界があると思われる。

- ①学習の評価は学習内容の習得に重きが置かれる。
 - ②その結果、どのような学習方略を用いたかに着目されることが少ない。
 - ③誤りや失敗は達成の低さと見られ、失敗から学ぶ機会が得られにくい。
- とくに学習方略の習得の中でもメタ認知については、体験を通じて学ぶところが多く、時間がかかりすぎると思われる。

そこで、教科としての『学修の技法』は学習のプロセスを学ぶ目的で行われているために、以下のような長所がある。

- ①最終的な提出物ではなく学ぶ過程が重要であることを学生が認知する。
- ②知識の習得が目標ではないので試行錯誤できる時間的余裕を確保できる。

これは従来の知識の伝授を行わねばならない教科に無いものであり、むしろここで培われた学習方略への関心を他教科で展開できれば、他教科での学習の質も変わってくると思われる。

図4は市川(2001)の学習動機の2要因モデルを示している¹⁸⁾。従来のキャリア教育では、将

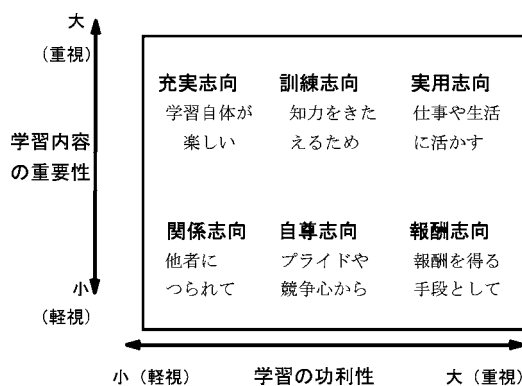


図4 学習動機の2要因モデル(市川 2001 による)

来の仕事に活かすという実用志向に重きが置かれがちであったかもしれない。学習方略を志向した教育は、知力をきたえるためという「訓練志向」や問題を解決すること自体の楽しさという「充実志向」に焦点を当てることができる。これは学習内容に重きを置いた動機付けであり、課題への内発的動機を高め効果的な学習をもたらすものである。

以上の視点を踏まえ、本学歯学部歯科医院見学実習で展開される教育プログラムの開発、効果の測定について、今後実証的なデータを積み重ね、検証していくことが求められよう。

4. 結 論

以上、歯科医院見学実習事前・事後学習において、「学修の技法」で学んだ学習方略を用いると、以下の効果が見られた。

- ①学習を効率的に進めることができる。
- ②習得すべき知識だけでなく、学習方略に対する学生の関心を高める事ができる。
- ③このような体験学習を積んでいくことは、キャリア教育に対する動機付けを高める。
- ④キャリア教育を促進するだけでなく、問題解決能力をも高める場として有効である。

一方で、そこで求められる学習内容に即して学習方略を展開できるよう、また、メタ認知形

成にも配慮し問題解決能力を高められるよう、授業デザインの作成、教材開発を行っていかねばならないなどの課題も明らかとなった。

本研究の要旨の一部は、第 33 回日本歯科医学教育学会総会および学術大会（2014 年 7 月 4 日・福岡県北九州市）において発表した。

文 献

- 1) 中央教育審議会(2008)『学士課程教育の構築に向けて(答申)』, 文部科学省.
- 2) 経済産業省編(2010)『社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために教育の実践現場から』制作・調査/発行河合塾.
- 3) 日本大学歯学部学務委員会(2013)平成 25 年度授業計画第 1 学年, pp.10~14, 日本大学歯学部.
- 4) 柳井修(2001)大学生のキャリア発達と教育, 柳井修著『キャリア発達論—青年期のキャリア形成と進路指導の展開』, 第 5 章, pp.109-111, ナカニシヤ出版.
- 5) 山崎晴美, 尾崎哲則, 網干博文, 上原裕美子, 高津茂樹, 伊藤公一, 桑田文幸, 大塚吉兵衛(2005) 歯科医院見学実習事前教育教材ビデオ『歯科医院について知る—その機能と役割—』の制作, 日本大学歯学部紀要第 33 号, 51-57.
- 6) 山崎晴美, 上原任, 押川麻衣子, 尾崎哲則, 中島一郎(2012) 第 1 学年歯科医院見学実習における学生の実習態度—指導医による評価と学生の自己評価について—, 日本大学歯学部紀要第 40 号, 13-20.
- 7) 佐藤浩章, 小林直人, 野本ひさ, 山本久雄(2010) さまざまな授業方法, 佐藤浩章編『大学教員のための授業方法とデザイン』第 2 章, 17-18, 玉川大学出版部.
- 8) 山中裕平(2000) グループ学習, 日本教育工学会編『教育工学事典』, pp.218, 実教出版株式会社.
- 9) 川喜田二郎(1967)『発想法—創造性開発のために』, 中央公論社, 東京.
- 10) Novac J.D., Gowin D.B. (1984): (岸学(2000) 概念地図法, 日本教育工学会編『教育工学事典』, pp.482-483, 実教出版株式会社).
- 11) Buzan T. The Mind Map Book: トニー・ブザン, バリー・ブザン『新版ザ・マインドマップ』, ダイアモンド社.
- 12) Tamblin L., Ward P. (2006) The Smart Study Guide: Psychological Techniques for Student Success. Wiley-Blackwell (L. タンプリン, P. ウォード(2009)『大学生のための学習マニュアル The Smart Study Guide』植野真臣監訳, pp.158-159, 培風館).
- 13) 浦上昌則(2010)『キャリア教育へのセカンド・オピニオン』, pp.120-127, 北大路書房.
- 14) 市川伸一(2000) 学習スキル/学習方略, 『教育工学事典』, pp.86-87, 実教出版株式会社.
- 15) 辰野千壽(1997) 学習方略の心理学—賢い学習者の育て方, 図書文化.
- 16) 三宮真智子(2000) メタ認知『教育工学事典』, pp.482-483, 実教出版株式会社.
- 17) 三宮真智子(2008)『メタ認知 学習力を支える高次認知機能』, 北大路書房.
- 18) 市川伸一(2001)『学ぶ意欲の心理学』, pp.46-61, PHP 研究所.